

OKSノ新聞 総集編

きんぎょ



編集：株式会社VIVANTニュース 東京都渋谷区道玄坂1-13-5 Nishi渋谷9F TEL 03-3477-2600 FAX 03-3477-7861 担当：藤井秀博（フワチ）、小嶋ウツク（Bad News）
発行：ビクターエンタテインメント株式会社 東京都港区北土佐3-6-7 ビデオプラザ TEL 03-5467-5590 FAX 03-5467-6903 スピードスター（コーポ）制作 高橋文郎（宣伝） 白田隆

チアノーゼ | ベースボール・ゲーム

カセット
97年8月30日発売
¥200 廃盤

大阪で行われたイベント『退屈退治』の会場で販売された幻の2曲入りカセット。エンジニアとしてシュガー・フィールズが参加している。以後の関西でのライブでたまたま売られていたがほとんど出荷されていない。
東京ではハイラインレコードのみで販売された。『チアノーゼ』はたまたライブでも演奏されるオルタナ・ナンバー。『ベースボール・ゲーム』もメロディアスな佳作。

もしもし

BN-102
CD
97年11月21日発売
¥1500 廃盤

96年末の結成から97年夏過ぎまでに細かにメンバーが録りためた音源からセレクトされたデモトラック集。関西を中心に発売された限定盤。『関西のインディーズ・シーンはこのバンドの出現のためにあった』とまで評された幻の名盤。当時まったく無名の存在だったくりにその名を轟かせることになった。
『東京』『虹』のデモバージョンが収録されている。特に『東京』は曲のできた瞬間が収録された貴重なテイク。

ファンデリア

BN-103
CD
96年5月15日発売
¥2000 廃盤

『もしもし』によって知名度が格段にアップした状況でリリースされた初のスタジオ録音盤。ライブで見せるテンションの高さだけではなく、音楽性の幅の広さを改めて見せつける、くりというバンドの評価を決定づけた傑作。ライブでお馴染みの『モノノク姫』やファンの間では人気の高い名曲『坂道』、さらにビップホップのリズムを取り入れた『Yes mom, I'm so lomly』など意欲作も収録。

東京

VICL-35032
CD
98年10月21日発売
¥1200 発売中

『もしもし』のオープニングを飾った名曲が平成の名プロデューサー佐久間正英氏の手によって生まれ変わった。カップリングにはくり結成初期からの代表ナンバーであると同時にライブでもお馴染みの変則ハードナンバー『尼崎の魚』、切ない歌詞とメロディながら打ち込みを導入するなど音楽性の幅を見せた隠れた名曲とファンの中でも人気の高い『ラビング』のタイプの違う3曲を収録したお買い得の1枚。

虹

VICL-35045
CD
99年2月24日発売
¥1200 発売中

壮大な曲展開が見事に結実したくりの代表ナンバー。これぞロックといえない強力なサウンド。カップリングの『りんご船』はエリオット・スミス・ライクなアバンギャルド・トラッド・フォークなメロディアス・ナンバー。『ハロー・スワロー』は大装束なシンフォニック・プログレ・サウンドを展開しながらもポップに聴かせざる異色ナンバー。再びタイプの異なる3曲を並べ、音楽性の幅の広さとクオリティの高さを証明した名盤。

さよならストレンジジャー

VICL-35055
CD
99年9月21日発売
¥3045 発売中

『東京』『虹』と3度佐久間正英氏をプロデューサーに迎え制作されたメジャー初のフルアルバム。先行シングルの2曲と『りんご船』を収録。アコースティックな肌触りな『ランチ』のオープニングから新人のファーストアルバムとは思えない落ち着いた展開だが、ハードな『オールドタイマー』異色な展開を見せるポップ・ナンバー『7月の夜』などを絡め、最後の7分にも及ぶ大作の『ブルース』で激しさと混沌の頂点を迎えるコンセプチュアルな名作。

青い空

VICL-35075
CD
99年8月25日発売予定 ¥1200

くりの今後の展開を占う待望のニュー・シングル。ハードなサーフ・ガレージなリフからくる攻撃的なロック・ナンバーでこれまでのシングルとは違った側面を見せつける。プロデューサーにはドクター・ストレンジ・ラウの根岸氏を迎え、カップリングにはライブでもお馴染みのナンバーをウィーザーのように仕立てた『サンデーモーニング』と11分にも及ぶセルフプロデュースによるダブチックな大作ナンバー『ガロン』が収録されている。

激ヤバ!!くるりのディスク・グラフィティー目差せコンプリート

特集：輝けるミンチーの歴史を試しに振り返って見る

ミンチーもこの号でちょうど発行されて1年を迎えます。ということで、今までミンチーでどんなことをやっていたのかを振り返って、今までくるりを知らなかった人、ミンチーを知らなかった人に知っていただくように作られた特別編集号です。



1年ちょっと前の話。くるりの存在を知っている人なんてほとんどいなかった。

しかし、それでは困る。と、くるりを大阪のライブ・ハウスで見て「このバンドはすごい!」と思うや早々と契約にこぎつけた元忍者使いのディレクターT氏(写真1)は考えた。さて、どうやればコイツらを世間知らしめることができるだろうか……。

メガネにノッパるロン毛に太っちょ。(写真2)見た目はマンガにも描け



そうなるほど特徴的だけど、ビジュアル系全盛のこの時代に大丈夫だろうか。音楽的には、ソリヤあもうそごい。まだまだ荒削りだがライブでのテンション、そこかしこに見える音楽性の幅の広さ。この逸材をどうにかしなければ。そして、長い髪を振り乱し(写真3)考え出した作戦、それがこのミンチーだった。



ミンチーの名前の由来はミンチ肉(写真4)からだと思われる節も多かったが、実は岸田君の好きな広島カープの、その頃大活躍していた外国人投手(写真5)の名前から。今シーズン はちょっと頑張りが必要かな。

Vol.1(写真6)が発行されたのはくるりがインディーズからリリースしたアルバム『ファンディア』の反響も覚めやらぬ7月下旬。くるりのマスコット「くるり号」(写真7)が表紙を飾っている。デビューに先駆け、くるりをより身近に感じてもらうとと考えられたキャラクターなのだが、岸田君



の好きな西鉄の1000系(写真8)がモデルになっている。しかも、これをデザインしたのはなんとガンダムやタイムボカン・シリーズのメカをデザインした大河原邦夫先生。スコイ! くるり好きの間ではもう有名な話だが、この後、このキャラクターはワゴンのワゴンタイプを改造した実物版も登場するという冗談みたいな展開を迎える。

この号では、まずはくるり3人の音楽好き度をアピールするためレビュー・コーナーが見開きで展開、お店の人との対談でも音楽的ルーツを語っている(こちら辺の内容に関しては別ページをごらんください)。その反面の素の部分はコラムで垣間見れるという仕組みになっている。ちなみに岸田君はモーター音の良い電車10選、佐藤君は原付の魅力について、モックんは夏についてつれづれに書くというまさに三者三様。その他にもスピッツのみなさんからコメントをもらったりと、盛り沢山な内容。

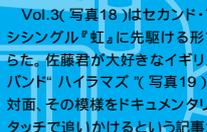
また裏面には今や伝説(?)となった初ワンマン京都のメロロでのライブの告知が載っている(写真9)の見逃せない。

メジャー・デビュー・マキシシングル『東京』のリリース直前に製作されたVol.2(写真10)では岸田君が表紙を飾っている。デビュー前の写真だけあってかなり初々しい。この号から特集という大きな柱ができ、ミンチー自体が前号と比べ読み物として飛躍的に充実した作りに仕上がっている。で、その特集というのが、ミュージシャンの中でもきっての電車好きを自認するラブリフの大館君(写真11)と岸田君による電車対談。「電気機関車(写真12)って車よりも要は戦闘機系(写真13)」とかSLについて今

口線走ってるのはどっちかっていうと観光バスなんですよ」などとはわからない人にはとことん意味不明の例えが飛び出たりと、対談する本人的には楽しそうなのだが、傍から聞いていると何のことやらよくわからない会話の応酬。でも、何故かかなり好評でした。その話の続きがラブリフのフリーペーパーの

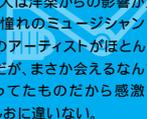
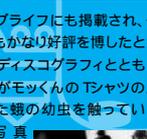


月刊ラブリフにも掲載され、それまでもかなり好評を博したとか。裏面はディスコグラフィとともに岸田君がモックんのTシャツの上に乗った甥の幼虫を触っている連続写真(写真14-

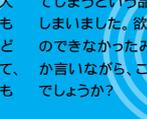
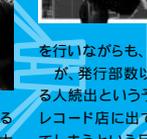


17)。特に後で見ている佐藤の表情が絶品でファンの間ではちょっとした話題に。Vol.3(写真18)はセカンド・マキシシングル『虹』に先駆ける形で作られた。佐藤君が大好きなイギリスのバンド・ハイラムズ(写真19)と御対面、その模様をドキュメンタリータッチで追いかけるという記事が特集。「ハイラムズの初来日公演を二度も観れて、ライブのみならずメンバー達とも二度もお話できたことは、もう幸せの極み」と佐藤君。取材当

時の感激具合はかなりのものだったようだ。もともとくるりの3人は洋楽からの影響が大きく、憧れのミュージシャンも洋楽のアーティストがほとんどなのだが、まさか会えるなんて、と思ったものだから感激もひとしおに違いない。



スミスなど尊敬するミュージシャンたちと次々と御対面を果たす。さらに、どういうワケかXTC(写真20)に会うという暴挙まで実現させてしまう。



それ以後、ライブで共演したオリーブ・アドレマール・コントロールをはじめ、ジム・オルーク、マーキュリーレヴ、エリオット・



そして、待望のファースト・アルバム・リリースのタイミングに併せて登場したのがモックんを表紙に据えたVol.4(写真21)。この号はモックん大活躍で、特集ではおいしいと評判のカレーをどれだけ連続で食べ歩けるかという、グルメ企画と大食い企画を合わせたようなバカげた企画にチャレンジ。「これをヴァーチャル体験したい人はハウスの洋食倶楽部(写真22)ですな」などとおいしいと評判のカレー屋さんのカレーをレポートで例えてしまうという暴挙

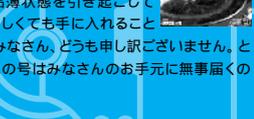
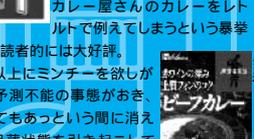
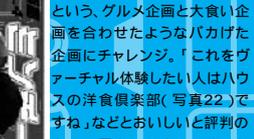


写真1

写真2

写真3

写真4

写真5

写真6

写真7

写真8

写真9

写真10

写真11

写真12

写真13

写真14

写真15

写真16

写真17

写真18

写真19

写真20

写真21

写真22

くるりのそー言えばあの「お店の人とこんにちは」したっけ

このコーナーはくるりのメンバーがくるりを応援してくれているバイヤーさんのところに向いて、いろいろお話をするというトークコーナー。音楽的なバックグラウンドも広いくるりを反映してルーツの話からライブでの対バンの話、リリースされた作品の反応などさまざまな話題を繰り広げてきました。

第1回目のゲストはくるりの地元タワーレコード京都店の小室さん。



この回は初めてということもあり、メンバー全員を相手にルーツミュージックについて語り合ってくれました。岸田「ニルヴァーナとかはめっちゃリアルタイムでしたから。特に好きやったわけでもないんですけど、ビートルズが特に好きちゃう人で誰でも知ってる根付いてるもんじゃないですか。それと一緒に特にハマったわけじゃないんですけど影響はありますね。」小室「ニルヴァーナは大きいですよ。僕より下の世代には必要不可欠っていうか」

第2回目のゲストはHMV天満橋店の黒井さん。

ライブにもよく足を運んでくれているバイヤーさんだけに、モックんと対バンやライブについていろいろと語り合いました。

黒井「好きなライブハウスは？」

森「心齋橋クアトロとかいいですね」

黒井「あ、この間、ゆずとゼロファン(笑)」

森「ゆずは同じ歳くらいやのに、お前ら若いなって感じて。なんかおっさんみたいですね(笑)。でも同じひらがなのバンド同士頑張らまじょうとか言われて(笑)」



第3回目はタワーレコード相模大野店の小清水さんがゲスト。



初の間東のバイヤーさんということと『東京』がリリースされた直後ということで関東での反応を佐藤君が聞いてきました。

佐藤「ここでくるりのCDを買ってくれるお客さんってどんな感じの人が多いんですか？」

小清水「やっぱりインディーズから流れてきてるお客さんが多いと思うんですよ。『東京』も出る前から予約とか入ってたし。でも『東京』が発売されてストア・プレイでかけても「今の誰ですか?」って反応が結構あって」

第4回目のゲストはタワーレコード販売促進部の井上さん

売進部ということで全国のお店が見渡せるがポジション。『さよならストレンジャー』についての評判はいかがなものか、モックんが聞きました。

井上「何回も繰り返し聴くごとに染み渡ると。私も素晴らしいファーストアルバムだと思っております」

森「ありがとうございます」

井上「内容もバラエティに富んでますよね、こだわりが随所にある」

森「やっぱり今回も佐久間さんとやらしていただいたこともあって、バラバラだけ一緒に結みたい不思議な統一感があるので」



ディスク・レビュー・ダイジェスト

音楽好きのくるりの3人がそれぞれその時々でチョイスしたお薦めディスク。どんな風に聴いて、どんな風を楽しんでいるのか4号分を一気にまとめてダイジェストで紹介します。



Willie Wisely
Turboherbet

「万葉集のようなサウンドメイキング(中略)もエリックになるのは曲の良さや生楽器の鳴りやまうく活してる」

Beastie Boys
Hellow Nasty

「ルーツ固まる中でどれだけ同時代性と音楽そのものの美味しさをリンクさせるかという点で大成している」

Elliott Smith
XO

「健康でも不健康でもなく、障でも障でもない(中略)トリップ感が味わえるという点で、新型ジャンルではなからうか?」

Beta Band
Three Ep's

「すごいと思うのがプリアミルやロゼス、あるいはピンクフロイドより長い曲が軽く聴けるしうまい」

V.A.
Tags Of The Times Version 2.0

「やられました。(中略)ヒップホップ嫌い(というか聴かず嫌い)な人に聴いて頂きたい名盤です。コレは」

岸田 繁 編



Smashing Pumpkins
Gish

「スマパンのデビューアルバムがコレ。(中略)97年までのスマパンを語る上で決して外すことができない1枚である」

Sean Lennon
Into The Sun

「98年上半期No.1(中略)私より1歳年上のシヨーンは恋をして大人になり、その若さで官能的に音楽を伝えてくれる」

Sloan
Navy Blues

「メロディやアレンジ、カマいいギター・サウンドに美しいコーラス、アレンジまですべて新旧のよき嵐風風」

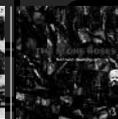
V.A.
ATOMOS tributo to the king! 01

「それぞれのアーティストの良さを出しながらも、その作品のイメージ・シンクとして曲を崩していません」

The Olivia Tremor Control
Black Foliage

「99年アルバムベストから早くも入りそうなオリコン新作。ホンマにおもちゃ箱をひっくり返したようなアルバム」

佐藤 征史 編



Space Hog
Chinesse Album

「ヘタするとキウモリになってしまい、そのバンドやけど、そのストレスのところでポップさを追及している」

The Police
Synchronicity

「世界最強のトリオバンドの1つ(中略)実験を一通りやり尽くした後の洗練された感じが出てるバンドおれんわ」

The Stone Roses
The Very Best Of

「このバンドのリズム隊はやっぱりすごい。マンチエスター系でここまでカッコいいアルバムを出してるバンドおれんわ」

The Meters
The Very Best Of

「リズムをカッコよく聴かせるという点においては、このバンドのサウンドは究極の形やと思うね」

The Jon Spencer Blues Explosion
Extra-Acme

「現在進行形の自分たちを見てほしいという彼らの意志がこのエクストラ・アクメを聴くとさらにわかる」

森 信行 編

佐藤征史の「大学生日記」総集編



ことを指しています)へのこだわりと原付サークルの話などが書かれています。

佐藤君のコラムはホント、タイトル通り。日記といつかつれづれなるままに書いていくという感じ。第1回は趣味の話。「私は原付が大好きです」ということで、バイクではなく原付(一般で言うとは違い佐藤君は250cc以下のバイクの

第2回ではうってかわってフジロックの話。前年の嵐のフジロックでは散々な目にあつたりの3人もこの年は無事楽しむことができ、その両日のライブの感想を佐藤君のトリッキーな文体で綴っています。「プライマルは最高でした。が、去年の教訓を忘れ、私は2年連続ビーチサンダルで行ってしまったから1日目は前日の雨で地面がドロドロで悲惨でした。でも鼻緒がとれまくっても裸足ですっと跳ねました。全然知らない人がデキーラやオレンジジュースをくれたり、大阪のパンクな兄ちゃん知り合いになれたのもよかったです」という具合。

第3回は散髪の話。かつてはロン毛を代名詞にしていた佐藤君ならではの話題か。「髪が長いというだけで、時代時代のロン毛の人(ちなみに今はふかわりよう)を「意識してるん?」とか言われるのももかつきます」と告白したり。でも、その後「まあ、しばらく経ってからだけど」、ホントに髪の毛切っちゃったしねえ。大学を卒業してもタイトル変更も無く無事迎えた第4回は、最近ハマっている大友克洋の話。「例えばささいなことをおもしろく描くこと、その逆のどんでもないことを自然に、日常的に描く作品もイイんです。ある意味くりの音楽につながる場所がある」なんて話も。

岸田繁の「各停で行きましょう」総集編



聴き惚れてしまいます」とかなんとか。

第2回では京都 大阪間移動での電車を使うのが一番効率が良いか。この回はまあ導入してJR新快速、阪急の特急、京

岸田君のコラムはもう趣味全開。電車話に花が咲いています。第1回では関東関西の良いモーター音の車輪10選。「まあ、関西で一番カッコイイのは阪急3300系のデイミツシユッぽいようなモーターでしょう。人は割とうるさいと思うらしいですが僕はずっと

阪の特急の3つを料金、時間、快適度などで検証、でも「まあ、結局はケース・バイ・ケースですね」という結論。なんだその結論は(笑)!

くもり無事デビューを迎え、地方に行き機会が増えてくると地方ネタが多くなってくる。そこでも岸田君は相変わらずの電車話。第3回には地方に行つて乗ろうと思った地方私鉄の車輛へのコメント。名古屋の名鉄5500系、福岡の西鉄100系、熊本の高松宮崎線電車のそれぞれにコメントしています。またキャンペーンなどで媒体を回ると意外や意外、岸田君と同じ鉄道を趣味としている人が多いことがわかる。そのレベルに上にはあるのだが、岸田君もレベル的にはトップクラス、トップクラスの強者と出会うといきなりその話で意気投じてしまう。第4回はそんな強者と遊びに行ったという話。名古屋の某FM局のプロデューサーと一緒に名古屋の電車乗りに行った岸田君。「(待ち合わせに)俺2分ほど遅れたんです。それで券売機のところまでAさんに電話をしたところ「今、電車が来るから急いせ!」との返事。慌てて切符を購入しようとしたところ「今、来てるのはしょーもない車輪かや、ゆっくり来てええよ」って(笑)まあ、そんなちょっとすげえ話でした。

モックんの「二度は言わんぞ!!」総集編

モックんのコラムはタイトルの意味は不明だが書いてる内容も実にとりためがなく、思い付いたことをほとんどにつれづれなるままに書いてるような雰囲気。

第1回なんて「今年の夏は暑い日と涼しい日のギャップがすごくて体調崩してる日とも多いん」とちやうかな、なんて始まって夏と言えば海みたいな話になって、最後は「なんか免許を取りたいなと思ってんねんけど」というところで落ち着くというとりとめのなさ。

第2回もそばアレルギーの話で始まっておきながらなぜかレトルト・カレーのお薦めベスト3を紹介して終わるといとりとめのなさ。まあ食に関するということわり関連性はあるか、ちなみにそのレトルト・カレーのベスト3というのは3位が明治の大銀座カレー、2位がSBの銀カカレー、1位がハウス洋食倶楽部で、洋食倶楽部に至っては「他の追随を許さない」とまで言う絶賛ぶり。番外編として安さと安定したお味のジャータはめいらくカレーも推薦していました。

モックんの密かな趣味である天体観測の話が第3回。実は中学に入学した時に親を説得して「ピクセンの80mm口径の経緯台屈折望遠鏡」を買ってもらったほどの天体好き。「2年くらい前の百武慧星とかはチャリンコで必死こいて鴨川の上流まで見に行ったりした」とうた。

4回目ではキャンペーンライブで地方を飛び回る日頃を反映して、九州四国の美味しいものについて、熊本「馬刺が最高にうまかった!」とか福岡の「『一蘭』っていうラーメン屋がおもしろかった」とか高知では「かつおのたたきがホマにうまかった」とか、ここでもとりとめもなく語っています。



読者のベスト穴

宛先：東京都 渋谷区 道玄坂1-13-5 MST 渋谷 3F
(株)パッドニュース くもり新聞「モンチー」読者の穴係

今回は総集編ということで、今まで掲載された中からおもしろいものをピックアップしました。こんな感じでどしどし質問できてください。

パンツはブリーフとトランクズどちら?

(札幌市 柳野麻路美さん)

岸田「ストライプ or チェックのトランクズです」

佐藤「シルク系好む」

森「たまたまブリーフをはきます」

森くんはいつも、おいしいものを食べてるんですか?

(福沢市 古田早里さん)

森「おいしいものを食べて、ていようい、単純に食いんぼうなんやろね。定食とか大盛りやし(笑)。あと、基本的に早食いよね(笑)」

怒ると一番怖いのは誰ですか?

(京都市 岩根孝江さん)

佐藤「オレとかあんま怒んないですからな」

岸田「俺の1人勝ちって感じですかね(笑)」

佐藤「オレ、生まれてからキレたんって3回くらいですからな」

岸田「でも、モックんも根性焼きするさかいな(笑)」

森「あれは……」

佐藤「モックんは体罰系のことをするかもしれません」

(笑)

森「すいません………(笑)」

好きな女性のタイプはどんな感じですか?私の勝手な想像では、佐藤さん<美人系>、森さん<かわいい系>、岸田さん<母性本能あふれる年上の女性>という感じですよ

(京都市 匿名希望)

岸田「色白でショートでおしゃれさん。」

佐藤「清楚で色が黒くなくて目の大きい。」

森「セクシーフェロモン系。ex 藤原紀重(笑)」

好きなにおい(匂い or 臭い)はどんなんですか?

(宗像郡 森知子)

岸田「花とか食べ物の匂いはもちろん好きですが、足の裏とか嗅いで「くっさー」とか思うのも好きです。」